

スポーツ科学論の一系譜

——「身体文化」概念をめぐる論争を中心に——

高 津 勝

はじめに

スポーツに関する科学的研究には、二つのルーツが存在する。一つは、近代公教育の成立とかかわって形成された体育学であり、もう一つは二〇世紀に入って急速に地球的な広がりを見せたスポーツを研究の対象にするものである。研究領域としては、後者は前者の一部とみなされていた。それらは体育指導やトレーニングに関する経験的認識を中心に発達したが、科学的方法に導かれた体系的知識として構築されるためには、医学や教育学など、隣接諸科学に大きく依存せねばならなかった。もっとも、文化として社会的存在形態をとるにせよ、教育の

衣を身にまとうにせよ、なによりもまずスポーツは「術」なのであって、それに関する研究そのものがアプリアリに市民権を持ったわけではない。

しかし、第二次大戦、とりわけ一九六〇年代以降、研究成果の一定の蓄積に加え、国際的、国内的なスポーツの普及と向上が、スポーツと政治・経済・文化との有機的な関連を強めるとともに、広範な国民のスポーツ要求を背景に諸個人のスポーツ活動の公的保障が、国家および自治体に対する国民の権利として自覚されるにつれて、医学や教育学から相対的に自立し体育学をも包摂する固有の科学領域、すなわちスポーツ科学ないし教育科学の枠を起えた広義の体育科学を構築しようとする動きが台

頭する。それはヨーロッパをはじめ世界的な傾向であった。⁽¹⁾ そのような動向のなかで、ドイツ民主共和国におけるスポーツ科学の形成は、その体系性・計画性において、さらに自然科学と社会科学の統一をめざす総合科学的志向性においてきわだった特徴をなしており、その体系の構築は常に基本概念の形成と結びついていた。そこで本稿では、ドイツ民主共和国におけるスポーツ科学の形成過程を、理論体系の構築に主導的な役割を果した基本的概念、とくに「身体文化」⁽²⁾ 概念を中心にして明らかにし、さらにそのことをとおして、スポーツの特質についても検討してゆきたいと思う。

(1) 岸野雄三「スポーツ科学とは何か」(水野忠文他編『スポーツの科学的原理』講座現代のスポーツ科学第一巻、一九七七年) 八八―八九頁。

(2) この術語・概念に関しては、岸野雄三『体育史』(現代保健体育大系2)一九七三年、第一章参照。なお、術語・概念の検討に関しては、W・ジーガーの次の指摘に注目する必要がある。すなわち①名辞やことば、術語は概念そのものではなく、記号であり、概念は現実を反映し事実の判定を行なうが、ことばや記号は直接現実と模写関係にない②言語的記号の規定ではなく、事態(Sachverhalt)

の説明に力点を置かねばならないことである。Vgl. Sieger, W.: Objekt-Begriff-Benennung zur Terminologie der Sportwissenschaft. Theorie und Praxis der Körperkultur 13 (1964) 2. S. 166, S. 172. なお、「身体文化」概念の検討に際し、それがどのような社会的基盤のもとで、どのような社会的課題を担い、客観的現実をどう把握しようとし、どのようにして形成されたか——いわば、概念の社会形成史的な検討を試みる必要がある。

一 「科学論」論争——スポーツは教育か文化か

スポーツ活動は、学校や企業体、地域社会、自然環境のなかで、各種のスポーツ種目や体操、ツアーなどの形態をとって現れる。この多様なスポーツ活動を総体としてどのように把握し、この領域の科学研究を全体としてどう性格づけるべきか。それをどのような個別諸理論で構成し、いかに体系づけるべきか。ドイツ民主共和国では、このような問題をめぐって、いわゆる「科学論」論争⁽¹⁾が、ソ連邦におけるブルジョア体育論批判⁽²⁾の刺激を受けてつづ、一九五二年から五三年にかけて展開された。この論争の内容を検討するまえに、まず、論争の前提についてふれておこう。

五〇年代初頭の政治・社会状況は、ドイツ連邦共和国（一九四九年九月）とドイツ民主共和国（一九四九年一〇月）の設立に象徴されている。単一民族が二つの国家を形成する過程で、東ドイツはNATO体制と連邦共和国の支配層の政策を批判しつつ、国内では「反ファシズム民主主義体制」から「社会主義体制」への移行を推進していく。スポーツ・体育の科学的研究に関しては、この時期、スポーツ行政の最高機関や研究・教育体制が成立した。ドイツ体育大学の設立（五〇年一〇月）、第一回スポーツ科学会議の開催（五二年五月）、ドイツスポーツ委員会スポーツ科学協議会の設立（同）、内閣付属身体文化・スポーツ国家委員会の設立（五二年七月）などがそれである。これらの施策をとおして、労働と祖国防衛にそなえるために健康で力強く意志強固な人間を育成すること、全面的に発達した人間を育てあげるために身体の教育と精神の教育を統一すること、体育活動やスポーツを全文化の一部として、あるいは全生活様式の強固な構成要素として確立すること、そのために民主主義的スポーツ運動を強化し実践的・科学的な研究活動を推進すること——が要請されていた。³⁾「科学論」論争は、

そうした課題に答えうる理論体系をいかに構築するかということとかかわってG・エアバッハを領袖とするアシピラント（博士号取得候補者）たち、いわゆるアシピラント集団とK・マイネルとの対立を基軸に、ライプチヒ体育大学（DHfK）を中心にして展開した。アシピラント集団の多くは体育・スポーツ史研究者であり、マイネルは体育方法に関する研究者によって支持されていた。この論争は、いわゆる体育やスポーツ研究の基本問題とかかわって、次のように要約しうる。

(1) 基本的カテゴリーと研究領域総体の基本的性格は何か。

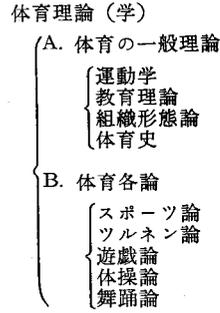
(2) この研究領域はどのような個別理論諸領域を持ち、その内部構成・体系はいかなるものか。

(3) 諸科学の体系のなかでのこの研究領域の位置と性格はいかなるものか。

まずこの論点に即して、対立する両見解の結論を示しておこう。マイネルによれば、基本的カテゴリーは「体育」(Körperziehung)であり、従ってこの研究領域は、総体として「体育理論(学)」とみなされる。それは図Iのような体系を持ち、教育科学の不可欠の一構成部分

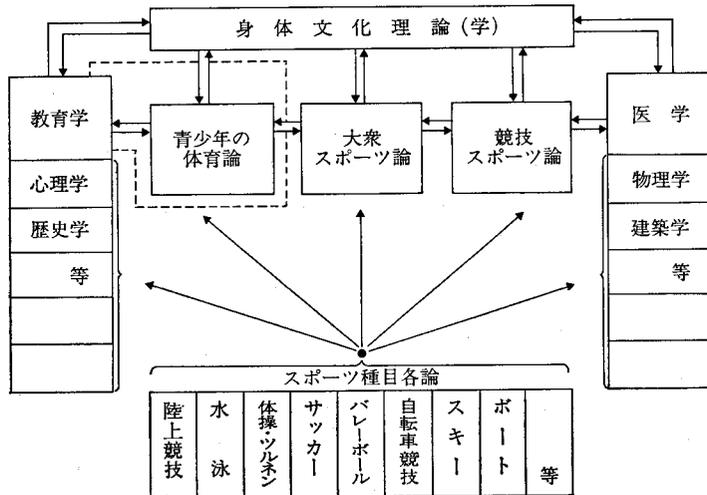
である。
これに対して、アスピラント集団は「身体文化」(Körperkultur)をこの研究領域総体の基本的カテゴリーに位置づけ、教育科学から相対的に自立した固有の科学領域である「身体文化理論(学)」(Theorie der Körperkultur)を構想した。そして、民主主義的スポーツ運動を基盤にする社会的スポーツ実践の組織形態に即して、「学校体育論」「大衆スポーツ論」「競技スポーツ論」の三領域に区分し、それらを理論諸領域総体の中心に位置づけたのであった(図II)。では、なぜこのような見解の相違が生じたのか。それを明らかにするために、まずエアバツハを中心に、アスピラント集団の論理の形成過程を分析し、ついでマイネルとエアバツハの論証の基

図I マイネルの理論体系



Über theoretische Probleme....., a. a. O., S. 12-13. による。

図II アスピラント集団の理論体系



Über theoretische Probleme....., a. a. O., S. 53. による。

本的な相違点をフォローしておきたい。

エアバツハが一九五一年五月のソ連邦の「体育論争」に刺激されて自国で「観念論的—ブルジョア的」スポーツ研究を批判し、民主主義的・社会主義的「体育」理論確立のための烽火をあげたのは、社会主義の基礎建設に着手する時期であった。この時期に、アスピラント集団は、広範な国民を結集しつつ民主主義スポーツ運動、すなわち身体文化運動(Körperkulturbewegung)を推進・発展させることを理論的な課題として受けとめ、この運動の構造や客観的な法則性を説明するために、「体育」より包括的な「身体文化」に注目し、それを中心的カテゴリーとして広範な実践を包括しうる理論体系を確立しようとしたのである。その出発点が「身体文化」を上位概念に位置づける試みであり、その説明をとおして、教育学の一分科としての「体育理論(学)」ではなく、自立的な科学としての「身体文化理論(学)」を展望した。もっともアスピラントたちは、エアバツハに象徴されるように、初期の段階ではソ連邦の理論状況を反映し、「人間の身体教育に関する科学」である「体育理論」をもって包括的かつ中心的な理論と考⁽⁵⁾え、「スポーツ」と

「体育」を同一視し、後者をもって前者の上位概念とみなしていた。⁽⁶⁾この考え方を転換させる理論的な契機は、一九五二年三月、モスクワで開催されたソ連邦内閣付属科学・方法論協議会身体文化の理論・歴史部会総会におけるD・A・クラットマンの次の概念規定であった。

「身体文化は、体育、身体的健康保持、身体形成やスポーツ技能の向上、身体文化運動での大衆の組織化に関する包括的な概念である」。⁽⁷⁾

こうしてかれらは、次のような論証によってマイネルと対峙する。第一に、「体育」をスポーツに象徴される「身体文化」の下位概念として位置づけること、第二に、「体育」やスポーツを社会に存在する文化の一部として把握することにより、「体育」やスポーツおよびそれに関する理論諸領域の総体に対する社会的規定性、つまり社会理論(学)としての性格を与えようとしたこと、第三に、スポーツの社会的組織形態を三領域論として明記し、個別諸理論の中心的な編成原理にすることによって、理論の実践的性格を明示したことであった。これらの特徴は、エアバツハの次の見解に端的に現れている。

「子どもと就学中の青少年の体育と大衆スポーツ、競

技スポーツの間には重要な区別が存在しており、われわれは、これらの領域の多様な諸問題を、専門的な諸理論において扱わねばならないと考える。従って、身体文化はすべての組織的諸問題、体育のすべての手段と施策、大衆および競技スポーツに関する上位概念とみなさねばならない。身体文化のこの包括的意味は——狭義であろうと広義であろうと——体育の概念によって説明できない。なぜなら、体育は身体文化の特殊部分にすぎないのであり、従って『体育理論』はこの特殊な領域を研究の対象にするのである。われわれの考えによれば、『身体文化理論』のみが身体文化の全領域を全面的に研究し、より詳細に規定する。もし、われわれが身体文化の理論の対象、目的、課題について明確にしようと欲するならば、われわれは身体文化とは何か、ということから始めなければならぬ。周知のように身体文化は、社会のそれぞれの時代に存在する全文化の一部である。その発展は、常に社会発展の法則性に規定されている⁽⁸⁾。

次に、「科学論」論争のもう一方の極、マイネルの見解を検討しよう。マイネルは、教育学的性格を強調しつつ、「体育理論」の対象と本質的性格、教育科学との関

連について次のように規定していた。

「体育は、幼稚園から超一流のスポーツ選手の活動に及ぶ一つの統一的な過程である⁽⁹⁾。」「体育理論が低次の体育実践と高次のそれとの仲介者であることは、われわれがすでに述べたところである。それとともに、体育理論は、徹底的に教育的意図を追求する。……体育理論は科学的認識の自立的な領域では決してなく、教育科学の不可欠な部分領域である⁽¹⁰⁾。」

「科学論」論争におけるマイネルの論証は、次の三点に要約しうる。第一は、「体育」には広義の概念と狭義の概念が存在する。アスピラント集団が「身体文化」概念を使用するのは、「体育」を狭義に、子どもと就学中の世代に限定するからである。成人をはじめすべてのスポーツを広義の「体育」と解すれば、「身体文化」概念は必要ない⁽¹¹⁾。

第二に、「身体文化」概念は、それが包括する諸活動の教育的機能を明確に位置づけられない。もっとも、それらの諸活動を「文化」との関連で理解するために「身体文化」という概念を使用することに同意する。しかし、「教育」こそがわれわれが研究しようとする対象の本質

をなすものであり、そこに貫徹する「第一のファクター」⁽¹²⁾である。共通なもの、本質的なもの、すなわち教育的側面、「体育」が第一の基本的カテゴリーである。

第三に、「身体文化」概念は、客観的實在の「具体的形態」を明示しえず、理論と実践に内容を与えることができない。「身体文化理論」は、土台—上部構造論と「身体文化」の関係やその「特殊ドイツ的性格」など、「体育理論」の内部に位置づかない一般の問題に関する「一般的科学的基礎」⁽¹³⁾を提供すべきであり、従って中心のカテゴリーでも、理論諸領域の内的構成部分でもない。

こうして論争は、いわばスポーツ科学派と教育科学派、社会理論派と体育方法論派の対決とでもいえるべき様相を呈した。一九五三年一二月、カリキュラム改革とかかわって、ライプチヒヒ体育大学が「科学論」論争の成果を暫定的に確認するために開催した会議をもってこの論争は終結する。しかし、そこでは、「三領域論」(学校体育・大衆スポーツ・競技スポーツ)を中心に個別的諸理論を構成するという合意が成立したにすぎず、基本問題に関する合意は未完に終わった。⁽¹⁴⁾その結着は歴史に委ねられる

ことになるのである。

(1) この論争は、ドイツ民主共和国では「理論—論争」(Theorie-Diskussion)といわれており、G・キルステンによるライプチヒヒ体育大学の動向を基準にした次の時期区分が存在する。

第一期(五二年一月—五三年四月)

第二期(五三年五月末—六月初旬)

第三期(五三年一二月)

第一期は、ソ連邦の体育「理論」論争に依拠したエアハットとヴィーチスタの次の論説に始まる。Erbach, G.: Bemerkung zu den Fragen der Körperziehung. Körperziehung in der Schule (KE) 2 (1952) 2. Wiczisk, G.: Die Ansarbeitung der Theorie der Körperziehung—das entscheidende Kettenglied für die Verbesserung der gesamten Arbeit auf dem Gebiet der Körperziehung und des Sportes. TPK 1 (1952) 8. これらの問題提起を受けて、五二年一〇月六日、ライプチヒヒ体育大学(DHfK)科学委員拡大会議でマイネルの報告「Theorie der Körperziehung」が行なわれ、翌年二月四日、それに対する反論「Bemerkungen zu theoretischen Problemen der Körperkultur」が、キルステンをはじめアスピラント(博士号取得候補者)たちの集団的検討を経て提案され論争が起った。ここでの論争は同年四月一〇—一一日の身体・文化スポーツ国家委員会付属「体育

理論「専門」分科会議に持ち込まれ、全国的討論が企画されたが、基本問題で合意が得られず、この間、企画されてきた東欧圏を中心とする国際会議も討論が不十分であるとの理由で中止された。いわば、対立点が鮮明化した時期である。

第二期は、ソ連の体育「理論」論争の経験を積極的に採り、討論参加者も若干広がるが基本的には停滞期で、この間、アスビラント集団を支持するP・カッツに代ってライプチヒ体育大学ではレブマン(案)が作成された。

第三期は、カッツのレブマン(案)で論争が再燃し、五三年一月十七日、「理論」論争の成果を暫定的に整理しそれをレブマンに反映させるために開催された「ソチヒ」体育大学科学委員会会議を「ソチヒ」論争は一時終焉する(Vgl. Kirsten, G.: Über einige Ergebnisse der Theorie-Diskussion und ihre Anwendung auf den Studienplan der Deutschen Hochschule für Körperkultur, Leipzig. TPK 3 (1954), S. 204-215.)。

(2) ソ連邦の体育「理論」論争は、一九五〇年八月二日のソチヒで掲載された「体育理論の淺薄化に抗して」Против вульгаризации теории физического воспитания を契機に社会的な課題を軽視した観念論的体育理論に対する批判が活発化し、五二年半ばに頂点を築いた。Vgl. Erbach, G.: Bemerkungen zu den Fragen der Theorie der Körperkultur. a. a. O.; Wleczisk, G.: Die

Ausarbeitung der Theorie……, a. a. O.

(3) Vgl. Entschlebung d. ZK d. SED: Aufgaben auf dem Gebiete der Körperkultur und des Sports (15.~17. März 1951), KE 1 (1951) 1. Beiheft, S. 3-14.

(4) ソ連邦では、身体文化の理論問題としての体育の理論問題が主流をなす一方、身体文化理論(案)ではなす体育理論(案)の問題はなすべからず。Vgl. Hunold, A.: Theorie der Körperkultur oder Theorie der Körpererziehung? TPK 2 (1953) 12, S. 90.

(5) Erbach, G.: Bemerkungen zu den Fragen der Theorie……, a. a. O., S. 29; Erbach, G.: Zur Diskussion in der Sowjetunion über die Fragen……, a. a. O., S. 56-57.

(6) Erbach, G.: Körperkultur—Körperliche Erziehung—Sport. KE 2 (1952) 4, S. 159.

(7) Wleczisk, G.: Die Ausarbeitung der Theorie der Körpererziehung……, a. a. O., S. 21.; Kantz, P., Erbach, G., Marschner, P., Skorning, L., Schuster, H., Wleczisk, G.: Bemerkungen zu theoretischen Problemen der Körperkultur. KE 3 (1953) 3, S. 108.; Redaktionskollegium, Über theoretische Probleme der Körperkultur und Körpererziehung. TPK (1953) Sonderheft, S. 44.

(8) Redaktionskollegium, Über theoretische Probleme

- der Körperkultur und Körperziehung, TPK 2 (1953) Sonderheft, S. 44. 本号には、ライプティヒ体育大学の二回にわたる会議の提案と討論が収められている。
- (6) Ebenda, S. 100.
 - (10) Ebenda, S. 7.
 - (11) Ebenda, S. 96.
 - (12) Ebenda, S. 97.
 - (13) Ebenda, S. 94, S. 98.
 - (14) Wonneberger, G. u. a., Geschichte der Körperkultur in Deutschland, Berlin, 1967, Bd. IV., S. 113.

二 「身体文化」概念とスポーツの社会的性格規定

社会主義の基礎建設の一環として広範な国民を結集しつつ学校体育、民主主義的スポーツ運動を発展させるためには、スポーツをめぐる多様で複雑な諸事象を包括的に把握することが必要であった。「身体文化」概念は、そのような課題に答えるものとして登場した。「文化」概念が注目された理由の一つは、文化は教育よりも諸事象を多面的、包括的に把握すると考えられたからであった。この概念のもう一つの特徴は、スポーツをはじめとする諸事象を社会現象として捉えることである。このこ

とは、エアバッハが「科学論」論争で引用した「身体文化は社会のそれぞれの時代に存在する全文化の一部分である。その発展は常に社会発展の法則性に規定されている」という命題に示されている。

この時期、スポーツを社会現象、つまり身体文化として把握するための有力な手がかりとなったのは、スターリンの著書『マルクス主義と言語学の諸問題』であった。この著作の影響を受けながら、ブルジョアのスポーツ論の批判的検討とともに、身体文化 (Körperkultur) / 体育 (Körperziehung) / 身体運動 (Körperübungen) などの基本的な概念が明確にされ始め、それを契機として一九五〇年代にそれらの概念がほぼ成立する。とりわけ、五〇年代前半には、「科学論」論争に関連して、次のような論点が提起された。

まず指摘しなければならないのは、西ドイツの成立を意図したブルジョワスポーツ批判である。とりわけ、「スポーツ自己目的論」「非政治的スポーツ論」が、スポーツの社会的関連性を隠蔽し、スポーツマンをイデオロギー的白痴化に導くものとして批判された。エアバッハは次のようにいう。「最近のブルジョアの専門書は、

個人主義的目的設定と階級的あいまいさを持ち、スポーツを帝国主義の膨張政策のために乱用する観念的—ブルジョアのイデオロギーに根ざしている。」「諸問題をその時々時代の全般的な経済的—社会的諸現象から離れて考察する。そのことが、ブルジョア的な『スポーツ科学者』を誤謬へと導き、スポーツにおける個人主義、いわゆる『非政治的スポーツ活動』の宣伝へと導く。実際には、『非政治的スポーツ』など存在しない。——われわれが民主主義的身体文化を發展させるためには、だから、身体文化のすべての問題を根本的に解決することが求められており、理論的な基礎づけに際しては、社会的性格がとくに明確に示されなければならない⁽¹⁾。

スポーツ、従ってまた身体文化の社会的性格の解明とかわかつて、五〇年代初頭には土台—上部構造論が積極的に導入された。民主主義スポーツ運動の指導組織であったドイツスポーツ委員会(DS)書記ヴァイシヒを例にとろう。かれは言う。「あらゆる場合に、文化、ひいては上部構造の一部分としての身体文化は、それ(上部構造—引用者)に照応するだけでなく、むしろ所与の土台によって生産され、その形成に貢献する⁽²⁾」。

だが、土台—上部構造の機械論的解釈は、文化を形式論理的手法で上部構造に帰属させ、人間の自由を求めめる人類史的行為とその成果として把握することを困難にする。もともと、身体文化と体育を構成するすべての要素が上部構造に属すると考えられたわけではない。言語や自然科学的認識、生産手段などと同様、上部構造の崩壊によって消失することのないスポーツ用具や施設は、スターリンの言語規定にもとづいて、土台にも上部構造にも属さない要素として理解されていた。身体文化やスポーツは、社会から目的や課題を受けとり、法や社会意識を身にまとったシステムとして存在し、総体として上部構造に帰属するとともに、土台によって規定されると考えられたのである。

このことと関連して注目されるのが、練習の形態をとって繰り返し行なわれる「身体運動」(Körperübungen)と身体文化や体育との区別であった。先行する時代の労働過程に内在し、走・跳・投などの基礎的な形態によって構成される身体運動を、「科学論」論争でアスピラント集団の一員として論陣を張ったスコルニクは、次のように特徴づける⁽³⁾。

(1) 生産と密接に関連している。(2) 特定の土台の産物ではない。(3) 全階級が同様に利用することが可能である。(4) 生産過程の変化をすみやかに反映する。(5) 上部構造の崩壊によって消滅しない。このような特徴をもつ身体運動をかれは、体育の最も重要な「手段」、身体文化の「根本的前提」と規定し、土台にも上部構造にも属さない階級的に中立性を有するものとして定式化した⁽⁴⁾。そしてこの定式によって実践を評価する次の視点が明確にされた。

一つは、身体運動そのものの指導や学習に関する方法論をもって体育理論を代表させようとする傾向、すなわち体育・スポーツ実践における社会的課題設定を軽視する傾向に対して批判的な視点を明確にしえた。つまり、身体運動を体育の手段と規定し、さらに体育を上部構造に位置づけて階級性を明示するこの定式は、体育実践そのものの社会的・階級的規定性を鮮明になしえたのであった。

次に、この定式は、「身体運動の社会学化」(Sozialisierung der Körperübungen)やプロレットクリト的傾向に対する批判的視点を明示しえた。つまり、練習の

形態をとって繰り返し行なわれる身体運動そのものに階級性が存在すると主張し、既存の運動財Ⅱ教材の全面否定と破壊によって体育実践の新しい地平を拓こうとする極左的傾向の不毛性を理論的に明示したのである⁽⁵⁾。こうして一方では機械論的傾向を孕みつつも、他方では、体操やスポーツ種目などの習得過程で繰り返し行なわれる身体運動(Körperübungen)の手段性Ⅱ中立性とともに、それを内に含み、かつ「根本的前提」とする身体文化の階級的被規定性が確認され、土台の究極的な規定性が明示されたのである。

五〇年代の後半以降、一部にみられた図式主義的機械論的な傾向は後退⁽⁶⁾し、身体文化の概念は、ほぼ次のように規定された。以下、五〇年代後半から六〇年代前半のドイツ民主共和国における研究の総括的な成果を示す『小百科事典—身体文化とスポーツ』から、この概念の基本的な特徴を五点にわたって示しておこう⁽⁷⁾。第一に、身体文化を、社会—文化(政治・経済・科学・道徳・芸術など)と多様な相互作用を営む社会現象、社会的—文化的存在として把握することである。この相互作用のなかで、身体文化は、当該社会の文化水準・生産力・生産

關係に規定されるときにも、前者は人間の「本質的諸力」達成の「前提」となり、かつ「本質的諸力」の発達に「貢献」するがゆえに、後者に反作用を及ぼす。この相互作用のなかで、身体文化は文化的な生活水準を表現し、また社会的な生活様式の形成要因となるのであった。

第二に、身体文化は、その生成・創造の「過程」であるとともに、その「過程」を経てもたらされた「所産」・「成果」でもある。そして、このような身体文化の具体的なあらわれが、生産過程から派生し一般化された形態で歴史的に発展した「人間の文化的創造的活動」＝「身体運動」(Körperübungen)であった。⁽⁸⁾

第三に、身体文化は、歴史—社会的現象、つまり階級的な性格を持っている。⁽⁹⁾歴史的に生成し練習の形態をとって繰り返行なわれる身体運動は、敵対的諸階級によって利用され、対立する身体文化が発生するが、「そのときの支配階級の理念と見解、イデオロギーが、身体文化の造出と普及にとって規定的である。」

第四に、この概念は極めて多様かつ重層的な内容をもつ。体育を身体文化の一部分として、成長中の世代の身体と精神に対して直接的な変化を及ぼす、計画的、組織

的な活動・方法・過程に限定するとともに「すべての衛生的に価値ある習慣と自体を養護するための措置……スポーツ場、スタジアムなど、社会から供給された施設、教育施設・法的規定なども身体文化とみなされる」。身体運動のための物質的—技術的諸手段を身体文化の概念に位置づけることによって、この概念は社会—経済的な視点を確立した。

第五に、スポーツと身体文化の関連については、技能や記録を強調するスポーツが現代の身体文化に対して広範な規定的影響力を持っており、身体文化を代用する概念としてスポーツが支配的であるから、現在の生活におけるスポーツの意義を考慮すれば「身体文化とスポーツ」(Körperkultur und Sport)と「二つの概念をリンクさせて使用することが現実に合致していること」が確認された。

- (1) Erbach, G.: Körperkultur—Körperliche Erziehung—Sport. a. a. O., S. 152.
- (2) Weisig, R.: Aufgaben der Wissenschaft auf dem Gebiet der Körperkultur im Kampf um Frieden und nationale Einheit. TPK 1 (1952) 1, S. 14f.
- (3) Skorning, L.: Die Bedeutung der Arbeit Stalins

„Der Marxismus und die Fragen der Sprachwissenschaft“ für die Theorie der Körperziehung und Geschichte der Körperkultur. KE 2 (1952) 3, S. 104.

(4) Ebenda, S. 105.

(5) しかし、モノニントウの定式は機械論的な傾向がなほなほある。この「Körperlungen (KU), Körperziehung (KE) を中心、上部構造」それ以外の中立的なもの——この三つのカテゴリーのうちに帰属させることを前提に論証されており、そのことはKEに比べて顕著であった。そこでは階級性が強調されるあまり、KEに従ってまた身体文化それ自体を人間の自由の拡大の一契機なるとして把握する視点が稀薄になった。

(6) Vgl. Dytschewa, T (Bulgarien): Die Körperkultur als dialektische Einheit überbaulicher und nichtüberbaulicher Seiten. TPK 13 (1964) Sonderheft, S. 20f.

(7) DHFK: Kleine Enzyklopädie Körperkultur und Sport. Leipzig, 1960, S. 1-3. 以下、特に断わらないうかぎりで、内容はこれによる。

(8) DHFK: Kleine Enzyklopädie Körperkultur und Sport. 3. Aufl. Leipzig, 1965, S. 3-4.

(9) 階級性については、七二年の改訂版(第四版)で「一定の社会形態のなかでの身体文化とスポーツの生成、発展、働きは、生産手段の所有関係に依存しており、ひいては階級的に規定されている」と、文化Ⅱ上部構造論的把握より

60年代に入ってから、スポーツの科学的研究にとって重要な概念が注目され始めた。「身体の完成化」(Körperliche oder physische Vervollkommnung)がそれである。この概念の物質的—技術的基礎は、科学—技術革命であった。科学技術革命は、社会主義社会の高度な発展と共産主義社会への漸次的移行を物質的に保障するものとして位置づけられていた。この過程で科学が「直接的な生産力」と規定され、社会発展を科学的に先導することの重要性が提起された。社会主義的生産関係に基礎を置くこの科学—技術革命のもとで、身体の完成化がクローズアップされ、身体文化・スポーツとそれに関する科学的研究は、国民のスポーツ要求を背景にしつつ、この概念に導かれて、新たな意義と性格を付与されるのである。この動向は、科学—技術革命が提起する諸課題を積極的に解決しうる全面的に発達した人間への希求と

三 「身体の完成化」とスポーツ科学論の展開

60年代に入ってから、スポーツの科学的研究にとって重要な概念が注目され始めた。「身体の完成化」(Körperliche oder physische Vervollkommnung)がそれである。この概念の物質的—技術的基礎は、科学—技術革命であった。科学技術革命は、社会主義社会の高度な発展と共産主義社会への漸次的移行を物質的に保障するものとして位置づけられていた。この過程で科学が「直接的な生産力」と規定され、社会発展を科学的に先導することの重要性が提起された。社会主義的生産関係に基礎を置くこの科学—技術革命のもとで、身体の完成化がクローズアップされ、身体文化・スポーツとそれに関する科学的研究は、国民のスポーツ要求を背景にしつつ、この概念に導かれて、新たな意義と性格を付与されるのである。この動向は、科学—技術革命が提起する諸課題を積極的に解決しうる全面的に発達した人間への希求と

結びついていてた。そこでまず、科学—技術革命が提起する人間像と身体の完成化の関連について検討しよう。身体の完成化の概念の解明は、労働過程の自動化による肉体労働の減少⇨身体形成機能の社会的衰弱⇨身体文化・スポーツによる補償というシェーマの否定と不可分であった。そのような、いわゆる「スポーツ⇨補償運動論」は、おおむね次のような論証によって否定される。⁽¹⁾

科学—技術革命は、労働過程における人間の位置と役割を変化させ、労働過程における自動化の進行は、肉体労働を縮小し、精神労働の比重を高める。しかし、労働対象や労働手段そのもののなかに、生産力を発展させる契機が内在するわけではない。人間こそが、あらゆる生産の出発点であり、生産力のなかで最も重要な位置を占めている。労働過程の主要要因としての労働力は、身体的諸能力と精神的諸能力の弁証法的統一をなしており、自動化が進行しても、労働力が永遠のカテゴリーである限り、身体的諸能力の生産力的性格と意義は不滅である。むしろ高度な精神的労働は、その労働力の消費と再生産の過程でそれに照応する高度の身体的諸能力を求めるのである。労働過程における肉体的労働の意義と労働力・

生産力としての身体的諸能力を同一視すべきではない。つまり、科学—技術革命は、精神的にも身体的にも全面的に発達した人間を要求し、身体を完成させること⇨身体の完成化が新たな社会状況下の全面的に発達した人間像、生産力的人間把握との関連でクローズアップされたのである。

次に、この概念の解明に先導的な役割を果たしたジーガーの見解を示そう。この概念は、いわば全面的に発達した人間像の身体的側面を明示するものとして、陶冶・教育目的と示す概念の一構成部分⁽²⁾として提起された。それが、生産力に集中的な表現を見出すところの身体的諸特性⁽³⁾として把握られ、単に目的概念や状態概念としてだけでなく、労働力の創造的な生産と再生産を含む目的的な努力の生物学的・社会的過程として把握される。すなわち、身体の完成という概念は、「生産力としての人間の身体的基本的な特性 (physische Grundeigenschaft des Menschen)」であり、人間の器官の意識的形成の過程に、つまり常に安定した健康⁽⁴⁾の結果と非常にすぐれた運動諸特性 (Bewegungseigenschaften) 常に高度な労働生産性、高い平均寿命によって共産主義社会の

客観的な一定の経済的倫理的美的規準に適應する過程に生起する。この過程は、身体文化に内在している。身体文化は、生産力としての人間の身体的諸特性 (physische Eigenschaften) の意識的な改良と完成化の過程として把えなければならぬ。そのことによって、それは全文化の重要な部分を表すのである⁽⁵⁾。さらにかれば、身体に負荷を加える身体的トレーニングを身体文化の中核とみなし、「科学的研究対象の中核は、身体的トレーニングである⁽⁶⁾」という命題を提起した。ジーガーにあっては、人間の身体の完成化をめざす生物学的・社会学的過程が身体文化であり、その中核が運動負荷をとまなう身体トレーニングなのである。そしてジーガーは上述の諸過程を研究する科学諸領域を「身体文化科学」(Körperkulturwissenschaft)と規定したのである。

身体の完成化を身体文化・スポーツの基本カテゴリーとする見解は、六〇年代の後半にスポーツ科学論に関して積極的に問題を提起したエアバッハの支持するところでもあった。すなわち、「身体の完成化は、技術革命の諸問題を克服するわれわれの時代の人間の無視しえない発展法則に、人間の全面的な発展の根本条件になつてい

る。その際、もちろん身体文化の発展におけるこれまでの重点は大きく変化する。そして、われわれは、人間に要求された新しい規準が身体文化の新しい質と形態へと導くことを理解しなければならぬ。」「われわれの身体文化のシステムを身体完成化の包括的な意味において広範に展開すること……が重要である⁽⁷⁾。しかし、ジーガーがスポーツの運動技能だけでなく、むしろ健康・長寿・生命への期待を中核にして身体文化を展望したのに対し、エアバッハは技能の向上や記録をめざすスポーツ活動とその達成のなかにこそ身体文化が集中的に表現されているという見解をとり、「身体文化科学」より、むしろ「スポーツ科学」と構想する。そしてこのエアバッハの見解が、ドイツ民主共和国の身体文化・スポーツをめぐる科学研究の基本方向を規定していくのである。六〇年代の中期には、社会発展の科学的予見と先導を唱えるエアバッハによって、スポーツ科学の目的・対象・構造に関する次のような輪郭が措定される。「スポーツ科学は、心理生理的統一体としての人間の身体完成化の生物学的かつ社会的法則性を、その発展において研究し、この過程の本質的特性と因果的関連を発見し、それを社

会的実践のなかで検証し、そして、それを概念、カテゴリー、理論のかたちで提示する⁽⁸⁾。この科学は、エアバツハによれば、「大きな複合をなす重層的な科学タイプ」つまり、隣接科学や母科学と密接な繋りを持つ複合科学であり、自然科学と社会科学の細分化された諸分科によって構成されるだけでなく、それらの統一を要求するところの、科学の体系のなかで「相対的に自立した構造」をもつ。そして、エアバツハは、この科学の内的構造を機能と課題に即して二つの系において把える。一つは、生物学的かつ社会学的諸過程の統一としての身体の完成の法則性であり、もう一つは、身体文化とスポーツの社会的な機能や作用の法則性——いわば社会科学的研究である⁽¹⁰⁾。

六〇年代後半におけるスポーツの科学的研究の主要な特徴の一つは、高度な達成をめざすスポーツ・トレーニングに関する研究の集中的な発展であったといわれている。そして、この成果がスポーツ科学の相対的自立性をますます明確なものにし、この科学の内部的变化と科学の体系のなかでのこの科学の位置の明確化をせまることになった。ライプチヒ体育大学の教育—研究体制の再編

成とかかわって、G・シュナーベルやF・トログシュによっても七〇年代の初頭に策定されたスポーツ科学の将来的な鳥瞰図⁽¹¹⁾は、そのような動向と課題を反映するものであった。そこでは、まず、諸科学の複眼的な分類基準に従って、スポーツ科学は次のように分類される。それは第一に、社会における人間の身体の完成化の過程Ⅱ物質の社会的運動形態を研究するから、対象Ⅱ物質の運動形態に即して「社会科学」に分類される。第二に、認識内容の一般性の程度に応じてメタ科学と対象科学の区別、哲学から構造・横断科学、さらに個別科学に及ぶ階層的秩序が存在するが、この分類に従えば、スポーツ科学は「個別または対象科学」に属する。第三に、認識目的Ⅱ方法的視点によって理論科学と応用科学に区分すれば、「応用科学」である。第一の分類は実在の構造を系統発生的な関連で、第二の分類は諸科学の有効領域や関連を、第三の分類は社会的実践との関連を明らかにするためのものであった。こうしてエアバツハが提起した相対的に自立した複合科学タイプとしてのスポーツ科学は、三つの観点から諸科学の体系に位置づけられたのである。

次にシュナーベルらは、スポーツ科学が単に客観的実

在・過程を反映するだけでなく、予め与えられた目的の実現をめざす道具的機能としての性格を強く備えており、この点で社会科学でありながら応用科学⇨技術科学⇨操作科学(Operativwissenschaft)タイプに属することに注目する。なぜなら、スポーツ科学は、本来理論と実践の媒体として機能せねばならず、そこにこの科学の本質があると考えたからである。こうして操作科学タイプをもつてスポーツ科学の基本的特徴がイメージされ、それを中核⇨結晶領域(Kristallisationsfeld)として、この科学の未来が構想された。操作科学としてのスポーツ科学の結晶領域とは、「トレーニング科学」(Trainingwissenschaft)であった。なぜなら、「歴史的に発生したスポーツ種目にもとづいたスポーツのトレーニングの過程だけが、身体を常に完成化しようとする要求を最良かつ全面的に保障できる」からであった。

- (一) Vgl. Sieger, W.: Produktivkraft Mensch und Körperkultur. Wissenschaftliche Zeitschrift der DHfK 6 (1964) 3, S. 53f.; Sieger, W.: Körperliche Vollkommenheit als neue gesellschaftliche Kategorie. TPK 13 (1964) Sonderheft, S. 52.; Erbach, G.: Über die Bedeutung der wissenschaftlichen Perspektivplanung

auf dem Gebiet der Körperkultur, unter Berücksichtigung sportsoziologischer Grundlagenforschung. TPK 14 (1965) 4, S. 350. なお、「身体の完成化」概念に関し、東独に大きな影響を与えたのは、Krebsの第二回大会の報告を受けて書かれたA. D. Nowikowの論文である。Vgl. Nowikow, A. D.: Einige Fragen zur Theorie und Praxis der Körperziehung im Lichte des neuen Programms der Kommunistischen Partei der Sowjetunion. TPK 11 (1962) 4, S. 318-331.

- (二) Sieger, W.: Zu theoretischen Fragen der Körperkultur in der sozialistischen und kommunistischen Gesellschaft (Gedanken nach dem VI. Parteitag). TPK 12 (1963) 11, S. 1003.
- (三) Ebenda, S. 1004.
- (四) シーガーは「健康」を人間の諸器官の生物学的現象の調和と眼及べらる。Sieger, W.: Körperliche Vollkommenheit als neue gesellschaftliche Kategorie. a. a. O., S. 51.
- (五) Ebenda.
- (六) Ebenda, S. 52.
- (七) Erbach, G.: Über die Bedeutung der wissenschaftlichen Perspektivplanung……, a. a. O., S. 351.
- (八) Erbach, G.: Sportwissenschaft und Sportsoziologie (II). TPK 14 (1965) 11, S. 950.

- (6) Erbach, G.: Sportwissenschaft und Spertsoziologie
(1). TPK 14 (1965) 10. S. 881.
(9) Erbach, G.: Zu wissenschaftlichen Fragen der
Sportwissenschaft. TPK 17 (1968) Sonderheft, S. 121.
(11) Schindler, G., Schnabel, G und F. Trogsch: Zur
Prognose der Sportwissenschaft. Wissenschaftliche Zeitschrift der DHK 12 (1970) 3. 25ff.

まとめにかえて

本稿では、ドイツ民主共和国におけるスポーツ科学論の形成過程とかかわらせて、「身体文化」および「身体の完成化」の概念を素描してきた。しかし、それは日本のスポーツ現実のなかで培われた眼を介してなされたものであり、その意味ではやはり、それを日本のスポーツ現実に向って逆照射することが必要なであろう。この課題にどれだけ答えうるか疑問であるが、若干の分析視点を提供することによって、本稿を終えることにしたい。

まず指摘しなければならないことは、スポーツは社会現象として、他の社会諸現象との有機的な関連において、把握されねばならないということである。スポーツを特徴づけるものは、体操やスポーツ種目の形態をとって繰

り返し行なわれる身体運動であり、それは生きた人間の物理・生理的な運動なくしては存在しえず、日常的な時間空間のなかにおいてそれから相対的に区別される固有な存在様式を持っている。それゆえ、それはしばしば社会的関連を断った自己完結的な人間の行為として、さらには社会形態を捨象した物理・生理的な運動としても把握される。しかし、スポーツとして現象する身体運動は、それらの運動形態を内包しつつも、歴史―社会的に形成された客観的な存在様式を持ち、施設や制度、組織を不可欠の要件とするところの歴史的な継承性と変革力を持つ社会的実践の一形態である。従って、スポーツは社会との有機的な関連において、社会的実践の一形態として、しかも、それを支える物質的諸条件を視野に入れて考察することが必要である。スポーツ認識は、社会認識としての性格を備えねばならない。

つぎに、スポーツは、その本性からして文化として把握する必要がある。文化としてのスポーツは歴史―社会的に形成された客観的な存在様式であるとともに、人間による人間らしい生き方の表出そのものでもある。人間は、自己の身体を素材にして諸能力を対象化し、スポー

ツの世界を創造するとともに、そのことによって自らを
発達させる。この可逆的な過程の質を規定するのは、対
象化された世界の豊かさなのであり、いわゆる「身体の

完成化」概念は、そのような脈絡において展開すること
が必要であろう。

(一橋大学助教授)